

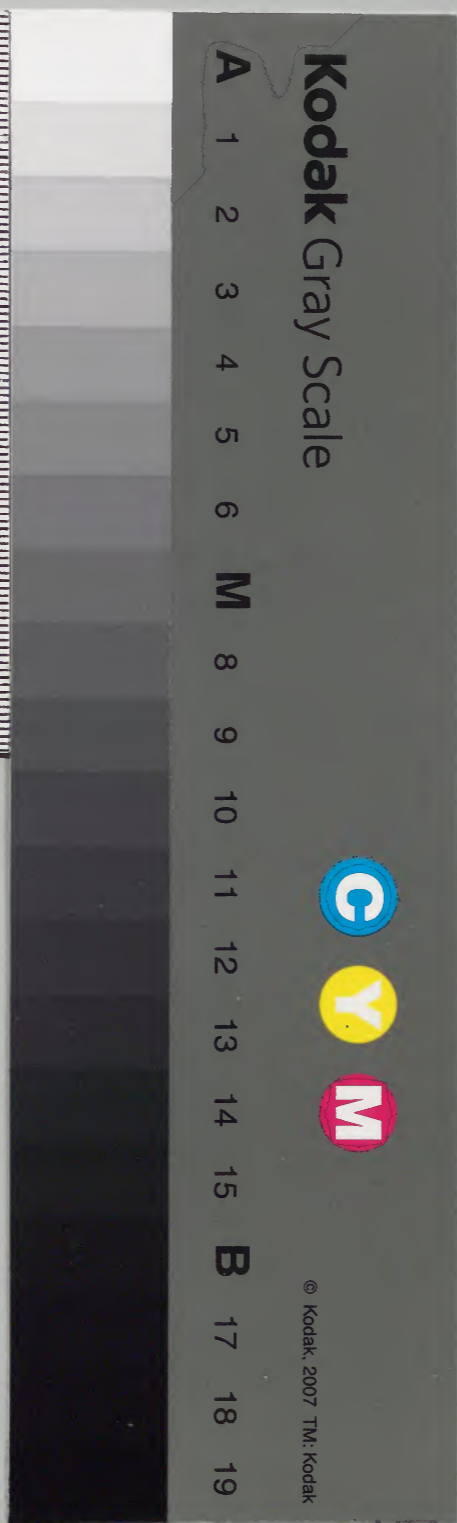
北越雪譜

二編夏

和書門類
三六五二六號
一函
一四架
七冊

和書類
三六五二六號
一函
一四架
七冊

內閣文庫
番號 和 36526
冊數 7 (5)
函號 175 78



北越雪譜二編卷二目錄

○雪類よ熊を得る

○雪中の葬式

○芭蕉翁が遺墨

○たせ成の容貞

○亀の化石

○餅花

○齊の神祭事

○煉羊羹の起立

通計十六條

○雪類の難

○龍燈

○芭蕉略傳

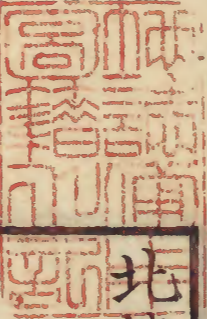
○化石溪

○夜光の玉

○齊の神功進

○天麩羅の始原

○雪中の狼



本舖近刻

○骨董集三編二卷四編二卷

右醒齋京傳先生遺稿京山人百樹翁補訂

○和漢印章考三卷 百樹翁著

○女粧考前後六卷 全

○古今の近古小至るまじく古圖を載古各と引て説を
下女の風俗不係りたる事ハ包羅輯載して餘こまろ且國字
の唇まゝの婦人乙夜の覺不供すア蓋茲本編雪譜の餘
帝爰よ有と以姑近刻二家の著目と奉伏請
雲願の諸賢刊よ先るの電評是祈

江戸 書賈 文溪堂 謹白

北越雪譜二編卷二

北越 鈴木牧之 編選

江戸 京大百樹 増修

○雪類は熊を得

酉陽雜俎云熊膽春ハ首不在り夏ハ腹ハ在り秋ハ左の足不
あり冬ハ右の足不ありと云々余試ハ獵師よまこと問ハ
熊の膽ハ常ハ腹ハありて四時同トト云リ蓋漢土の熊ハ酉
陽雜俎の説の如クハ凡獵師山ハ入りて第一ハ欲る処の物
熊あり一熊を得まハその皮と其の膽ト大小少も多も大も
ハ金五兩以上よいともろろハ獵師の欲るまろろとも熊ハ猛ク且
智ありて得るハ易ハらざる雪中の熊ハ皮も膽も常ハ倍寸由也よ
雪ハ穴居するハ尋ね搜ハ獵師とも力と裁せてまこと捕ふ種

の術ある事初編に記せりたましく一態を得るとも其倅に價と
 分り免利得薄しきまじりて雪中の態一人の力にて得事
 難しとぞ○茲は吾が住道在る后谷村とあり此村の弥左
 工門といふ農夫老るる双親年頃のねづいよまうせ秋のそよめ
 信州善光寺へ参詣させけりさてある日用あるて二里たうり
 の所へゆきたる苗守隣家の者過て火をきりたちまら軒ふ
 うつりけきば弥左工門が妻二人の小兒をつもて逃去り命一ツを
 助りけるのそ家財のろくも目前の畑とありぬ弥左工門ハ村ハ
 火災ありとききて走飯りし今今朝や一家の灰とありてたゞ妻子の
 无食をよろこぶのそ夫婦心正直うて親も孝心ある者ゆゑ人こそ
 を憐れまづまづらく我が家も居るがを奨る富農もあつて
 けるがゆゑにハ奴僕の業をとりても恩は報ゆる双親飯り来りて

賺地双て人の家も在らんハ心も安うらうとて諾す竊は田地を分る質
 入るその金にて假の家を作り親も飯りて住けり草を刈鎌をさし買
 求るほどありけきハ火の為は貧くありし小家を焼くる隣家一對し
 て一言の恨とす守交り親むこと常よりさうさうかくてその年も
 くるまで翌年の二月のそめ弥左工門山へ入て薪を取りしあると
 谷は落るる雪顔の雪の中はきりり黒き物有遙ふことを見て
 め一人のなきまふうとて死しるるやと幸うて谷より是と視ま
 ハ稀有の大態雪顔は赤殺したるありけりハ雪顔といふ事初編にも
 くらしく記するまじり山小積りける雪二丈もあまるが春の陽気下より
 惹て自状は碎け落る事大磐石を轉しおとさるの如くこまは遇む
 人馬はさらあり大木大石もうちおとさるるさききハ大態もこまは
 目もさるるけり跡なきゆへハよきものをさしけりりと大よ悦びはと

膝もどろんとおひひ〜が日も西小傾〜明日き〜とて人の見
 つげざるやうよ山刀み〜態を雪小埋めか〜心小同志〜
 家やりの親もか〜りてよろこぶせ次のあ〜皮を剥〜用意とあ
 してか〜つ〜小膝ハ常倍〜大あり〜ゆき弁当の面桶入
 して持〜り〜人ありて皮を金一兩膝を九兩買〜り膝を
 たらす十兩の金を得て賃入〜せ〜田地ともうけ〜り
 屢幸ありてわ〜家もあら〜作りたていせん小南〜りて栄けり
 弥左門が雪顔ハ態を得〜るハ金一釜を握得〜る孝子也此〜
 く年頃の孝心を天のあをれ〜玉い〜ならんと人々賞〜りと交
 谷鶯翁が〜りき

○雪顔の難

吾が住塩澤ハ下組六十八ヶ村の郷元〜ハ郷元と與り知る家ハ

古来の記録も残〜る其旧記の中ハ元文五年庚申今より二月廿
 三日曉湯沢病の枝村握切村の後の山より雪顔不〜小押落〜
 其响百雷の如く百姓彦右門浅右門の両家〜
 家つ〜彦右門并小馬一疋即死妻と嗣息ハ半死半生浅右門ハ
 父子即死妻ハ梁の下小壓〜て死小〜り此時 御領主より彦
 右門息一米五俵浅右門妻一米五俵賜〜事を記〜あり此魚
 沼郡ハ大郡也 会津侯御預りの地あり元文の昔も今も
 御領内の人民を拾取〜事仰〜く尊む〜そのありが〜
 吾が后〜も示〜んとて華の序〜る近年ハ山家の人家と作
 小姓雪顔を避〜て地を計るゆゑその難〜も山道と往來
 時あた〜よう〜死〜るの間の事あり初編ゆ〜り如く
 〇ホウラの冬ゆあり雪顔ハ春ゆあり他国の人越後よ来りて山

下と往来せむホウラあつてを用心まづー他国の入るまふ死
たる石塔今も所々ありおそろるア〜

○雪中の葬式

吾が国小雪吹といふハ猛風不意に起りて高山平原の雪と吹
散しその風四方ふまきめぐりて寒雪百万の箭を飛ぶ如く
寸隙の間をも許さばふさぎのるもなまて往來の人ハ通身雪ふ射
まて少時小半身雪小埋まて凍死する夏まふもいづるごとく
秋ふきハ晴天も俄に曇り二日も三日も雪あま〜てふきあ
事あり往來もさるる為小とまること毎年あり秋時ハ臨んで死亡
せしもの雪あれのやむを待も程のあつものゆゑせん〜雪は
狐犯て棺とせし事あり施主ハわりやうも志のふ〜他人乃
困苦事見るもきめど〜ありこれ雪国ハ一の苦状といふ〜我江

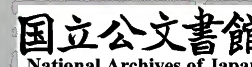
戸小逗留せしるる旅宿のちりきあ〜りふ死亡ありて葬式の目大
嵐なるふ宿の主もさるる往とて兩具き〜今日
の仏に〜ある因果ものさやかふる嵐は値て人ハ雅義をかふる
を〜い〜とも極樂〜い〜あ〜つ〜た〜立〜つ〜る〜を見
て吾が国の雪吹は比ぶ〜い〜安〜とおもつて

○龍燈

筑紫のあぬ火といふ古哥もあま〜とむ〜よりその名た〜あま
祓く人のある所あり其の勢るさまハ春暉ハ西遊記にありぬ火を現
たりと詳〜あるせり其あぬ火と〜世ハ竜燈のた〜ひ〜あ〜す〜
我國蒲原郡ハ龍瀉と云東西一里半南北ハ一里の湖水
毎年二月の中の午の日の夜面の下刺より丑の刺頃まで水上ハ火然るを
里ハ龍瀉の方燈と云現る人多〜余が友人〜をき〜し〜

西道記不ある一なるつじのちぬ火とあかさまなり近年湖水を北海へ
 おとす新田とあり也多湖中の万燈も今人家の億燈とあまり又我國の
 八海六巔の少の地あり依て山の石寺絶頂ハ八海大明神の社あり八月
 朔日を縁日と山よりの人多く此夜ふたぎと竜燈あり其来る所と見
 多る人なりとふおと竜燈とよみあかなく春夏秋あり諸国ふある夏
 諸書ふある一なるを見ふいづもあかさま海より出山よりもなる
 毎冬其百其制限定りある事甚奇異あり竜神より神仏供と云
 普通の説を且とあふ珍き竜燈の談あり少く竜燈を解き説を
 ハ姑くあると好華家の茶活又供す
 我國頸城郡米山の麓に医王山米山寺ハ和同年中の創草をいふ
 小薬師堂あり山中女を禁み此米山の腰と米山嶺とを越後北海の驛
 路あり此辺古跡多し余先年其古跡を尋んとて下越後ふある

時新道村の長飯塚知義の譚ハ一年夏の頃雲のおふ村の者ども必
 米山のなりし小薬師へ系詣の人少かりたるため御鉢とよ所小屋ニツあり
 其の小屋一宿あふ是日六月十日也此御鉢とよ所(竜燈のある夜あり
 おひまうけよと竜燈とよ事よと人あまりをし小面の刺とちも頂がく
 そあききりあまじふ大ある手鞠の如く小なるハ雞卵の如く大小も此御
 鉢とよありをさよと飛行もあふいあやうあふハちるそのさぬ
 心あり遊ぶが如く其光りハ螢火の色ハ似たりつあも光りあふもひるあり
 无舞いぬぐてあふくもとあまハあくあまおりてかぞふとあふ小や
 の入り口剛人々ひをまりて覗みとふ人ありもあふさるやう老大小の竜燈
 ニツツ小屋の更七八間さまききききしをかぞふひくすしと云ハ形ち鳥の
 やふ見え光り咽の下より放つやうあり接近くあふかかあもたふ
 視るけんとかひりふわのハあふとあふとあふ飛ぬぐり此夜山中



一宿の心得多し心用の破る筒をも持せし手たはしの上手志あり
若ありしが光と目的みくんとまを老人ありてやまてとわしめあふ
たいや此童燈ハ竜神より薬師如来さけあふあり罰ありうと叱りる
声小竜燈ハおどろきさるやうてたるう遠く飛せしと知義語まき

芭蕉翁が遺墨

おろそ越後の雪とよこころ哥あふこあまとも越雪と目前
よこころいまもさあり西行が山家集頓阿が草菴集やも越後の
雪の哥あふ一以韻僧とらも越地の雪ハ志まきまき一俊頼朝臣ハ
降雪小谷の傍らつりて梢を冬の山路ありらほららら実ハ越後
の雪の真景ふまきまきとまあそん越後ふまきまき玉いふあふ俗よ
り哥人ハ居あがら名所をまきまき伊達政宗卿の御哥よ
まきまきとも誰ハ越人園の戸も降らつめまきまき雪の夕暮又まきまき

みづらうとらある道絶て雪小隣のちまき山里一以君ハ御名たの
まき哥仙めておろまきまき一も名かまきまき御哥もあつて人の
口碑やもつて雪の实境をまきまき玉いハ志まきまき御国も深雪
まきまきわたり芭蕉翁が奥小行脚のまきまき越後小入り新渡り
海ハ降る雨や恋まきまき身宿寺泊りて一荒海や佐渡
横ハ天の川まき夏秋の遊杖まき越後の雪と見ざる事必せり
まきまき近來も越地小遊ふ文人墨客あまきまきと秋のまきまき
まきまき雪をまきまき故郷ハ逃飯るゆ名越雪の詩哥もまきまき紀行
まきまき稀ハ他国の人越後ハ雪中まきまき文雅まきまき筆あのと
才事あまきまき吾が国三条の人崑崙山人北越奇談を出版せり
文化ハ一辞半言も雪の事をまきまき今文運盛やまき新板湧ら
まきまきまきまき日本第一の大雪ある越後の雪と記まきまき書

芭蕉翁訪凍雲図



凍雲を
たのびて
菓摘み
つ通り
志と
料枕
左を成



ふーゆゑも吾が不学ども忘せて越雪の奇状奇蹟を記す
 後来よ示し且越地係り一事は姑く載て好事の語柄とす
 さて元禄の頃高田の御城下小細井昌庵といひ一醫師ありけり
 一青庵といひ俳諧を善して号と凍雲といひひとせをせ公翁
 奥羽あきまのつり凍雲とたづねて「菜欄」よどまの花を草枕と
 発句志けし凍雲とありあす「萩」のすまを巻あぐる月「秋時」の
 をせぬ肉筆二枚ありて一枚は唇損と覚く淡墨をぬりて一抹乃
 痕あり二枚とも小昌庵主の家ふつてへを后小本唇同所の親族
 三崎屋吉兵衛の家あつて唇損の同所立智如来の寺ふのまゝあり
 るふ文政のころ此地の邦君風雅とこのまゝ玉ひゆゑか二枚持主よ
 りて今二枚とも小昌庵主の家へ奉りけし吉兵衛へ常信の三幅對よ白銀五枚の寺にもあつき賜あ
 りて今二枚とも小昌庵主の家へ奉りけし吉兵衛へ常信の三幅對よ白銀五枚の寺にもあつき賜あ
 りて今二枚とも小昌庵主の家へ奉りけし吉兵衛へ常信の三幅對よ白銀五枚の寺にもあつき賜あ

葵亭公翁ハ蒲原郡加茂明神の修験宮本院名ハ義方吐醋と号し
 又無方齋と別号を隱居して葵亭といひ和漢の博識北越の聞人
 あり芭蕉の件の句むのふ見えざるまゝあり

百樹曰芭蕉居士ハ寛永廿年伊賀の上野藤堂新七郎殿の
 藩よ生る次男寛文六年歳廿四もして仕絆を辞し京ふして季吟
 翁の門に入り春を北向雲竹よ学ふとめ宗房といひり季吟翁の
 句集のりの中も宗房とあり延宝のすゑをめて江戸ふ来り杉風が
 家小寄小田原町廻屋 藤左エ門剃髪して素宣といひり桃青ハ后の名あり
 芭蕉といハ草庵小芭蕉を植しゆゑ人よりよひる名の後ハ自号
 ありり翁の作小芭蕉と移辞といひ文ありその終りの辞ふ「なまよく
 花さくも花やうあらず 莖太けもとも 芥ふあらずかの山中不材の
 類木わたくしてその性よ一僧懐素ハ是小筆を走らし張横渠を

新葉を見て修学の力とせしめあり予その二ツをとり守たつ以陰よ
 遊びて風雨小破も易きを愛もたせぬ野分して鹽小雨ときき夜
 引引以色蕉庵の旧蹟ハ深川清澄町万年橋の南詰小対ひら
 今或侯の庭中不在り古池の趾今存せりとも余芭蕉年表一名
 考証未定ゆゑは刺とやうさす翁身を世外小置て四方小雲水一江戸
 小趾をとり守終つひ元禄七年甲戌十月十一日旅小病て夢ハ枯
 考証未定ゆゑは刺とやうさす塾をかけ廻るの一句をのりて浪花の花屋が旅函小客死せり
 是舉世の知る処あり翁が臨終の事ハ江州粟津の義仲寺
 小のりしる榎本其角が芭蕉終焉記小目前視るが如く小記せり
 此記を視る小翁のきん菌毒小ありて痢とあり九月晦日より
 病臥僅よ十二日ありて下泉せり病時病床の下はありし門人
 木節木節翁小葉をありて去来。惟然。心采乃。之道。支考。香舟
 たる医をあり

。丈草。乙州。伽香以上十人あり其角ハ以時和泉の淡の輪と
 り所小ありし翁大坂ありて病ともあり守して十日小暮り
 十二日の臨終小遇て奇遇とあり以上終焉記
 を摘要す其角が終焉記の
 文中小此記義仲寺小施板ありて人のむちあり
 あゝ又キ角がかれをありてあり義仲寺ありし葬礼義
 信を及し京大坂大津膳所の連衆彼官従者までも以公翁の情と
 慕慕るありて招招ざる小馳来る者三百余人あり淨衣その外智月と
 百樹云大津の米屋乙州が妻縫たてて着せまおら守又曰三千餘
 人の門葉遠ひとら合信合する因と縁との不可思議不可思議いうやも
 勘破勘破ありし百樹おらるる孔子は三千の門人ありて門人十
 哲をとり守芭蕉は二千の門葉ありて庵小十哲とあり門人あり
 至善の大道と遊藝遊藝の小技と尊卑の雲泥ハ論論よむありしと
 とも孔子七十ありて魯国の城北泗上小葬て心喪と服心喪と服する弟

子三千人芭蕉五十二やして粟津の義仲寺小葬る時招ざる
 小来る者三百餘人是以人小師たるの徳ありしをとおのり
 盖芭蕉の盆石が孔夫子の泰山小似たるをいつたり芭蕉曾駟佺
 の風輕薄の習少しもあるりし吟咏文章あてもある共翁の
 其角がいつしごとく人の推慕する事今小於も不可思議の奇人
 ありされば一句一章とつども人ごも成句碑小作りて不朽小傳ふ
 る事今猶句碑のあらざる国あり吟海の幸祥詞林の福禎文
 藻よ於て其人の右小出る者ありささし本文もいつるまごかりそあ
 小のいもてくる菜欄の一句の墨痕も百四十余年の后小いつりて
 文政の頃白銀の光りをををまつごとく論外不思議といふ
 蜀山先生嘗謂予曰凡文墨とまつて世小遊ぶ者画ハ論せず死後
 よいつり一字一百錢小当らる身とまつり文雅幸福足へといふ

まきて以先生の今其幸福あり一字一百錢小当らる事嗟乎難れ
 ○ささし芭蕉が行状小傳ハ諸君小散見して普く人の知る
 所ありまごも公翁の容見ハ舉世知る人あつらるばささば爰小
 一証を得るゆゑ以雪譜に記載して后采小示をいかる瑣談も
 世小埋寛せん事のきけまごいざ狀ハとて雪小搏寸筆の老婆心
 あり。あふ二代目市川團十郎初代段十郎の排号と嗣で
 才牛との后は相違とあらたむ元文元年あり以相違ハ正徳享保交
 。寛保を盛小歴する名人あり妻をおさむといひ排名を翠仙といふ
 夫婦とも小俳諧と能し文雅を好り以相違日記のやう小昏
 残したる老の樂といふ隨筆あり二百四五十席の自筆あり嘗相外山といふし
 を狂奇坐真顔翁珍唇まごの懇望してかの家より借りたる時
 余も亡兄ととも小読しことありまごのあふ小芝居土用やまごの

うらち柏窓一蝶が引船の絵の小屏風と風入とさるる旁にて人
 象をさきまゝとあづら絵繪ふむかをとおひいひめて独言いひる
 を記しるる文ふ「我も幼年の頃をいめて吉原を見らるる時黒
 羽二重よ三升の紋つけゆるり袖を着て右の手を一蝶ゆひら
 き左りと其角ゆむらして日本堤を往し事今ふ忘すゆふり
 いせふ名をひびくせしれど今いれまきこ入あり我は幸ふ世ふありて名
 もまゝ傾る聞えり中畧今日小川破笠老まゐらるむのの
 ちちのせらむとるぬふ芭蕉翁いれおめてうまといふあていろ白
 く小兵あり常ふ茶のつむぎの羽織をきらる嵐雪よ其角が所
 ついてるるよとものちづうふいそむしとくくもたり」此を
 を今目前小見るか如し翁の門人推然が作とるる翁の肖像ありい画幅
 の肖像せし流傳せらるものといひ説くといふあり
 一 小川破笠俗称平助壮年の頃放蕩めて嵐雪と俱ふ俗称服部
 彦兵衛

其角が堀江町の居小食客たりし事件の老の樂又破笠が
 自記トキも見ゆ破笠一ふ笠翁まゝ印觀子夢中庵等の号あり
 絵を一蝶小学び俳諧ハ其角を師とて余が藏する画幅小延享
 三年丙寅仲春夢中庵笠翁八十有四華とあり描金を善して
 人の粕をなめず別ふ一趣の奇工を為す破笠細工とて今ふ賞
 せらる吉原の七月創て機燈と作りて今ふ其余波を残り傳詳
 せらるるもそのこととてわらせり

○化石溪

東游記よ越前国大野領の山中化石溪あり何物もとも半月あ
 るいハ一月廿溪小浸しおけかあり守石小化石きざつ物いさらあり紙
 一東蕪あやめてむきひらるる石小化石を見らるとるせり我が越後えちごも
 化石溪あり魚沼郡小川の在羽川とる溪水一蚕の腐たるを流し

一夜おして石小化したるを友人葵亭翁がからまきかの大野領の化石溪ハ東遊記の為小名高けども我う国の化石溪ハ世を知られず又近江の石亭が雲根志変化の部小編入あり語云越後國大飯郡小寒水滴といふあり此処深山幽谷おして互寒の地なり此滝坪ハ万物を投ておおくお百日を過ぎしして石小化すごと滝坪の近所おて諸木の枝葉又ハ木の實その外生類よても石小化するを得るとして予去る頃汝滝の石を取らせ一人ありて見るは常の石小あつて全鉢鐘乳あり木の葉を石中おやるとも則石あり雲林石譜おつて鐘乳の摺化して石小あつておらん云收之案る小越後小大飯郡おて又寒水滴の名もききし人あり語るとおまは傳聞の誤るおらん蓋北越奇談小会津小隣る駒ヶ岳の深谷小入ると三里おして化石溪と名付る処あり虫羽草木といふとも

溪小入りて一年と歴もつてお化して石とよめる其川甚苦寒おして夏も涉つておらん如く又蕪門岳の北下田郷の深谷おて化石溪あり云雲根志の説おらんらの所を聞誤るおらん

○亀の化石

吾う同郡岡の町の旧家村山藤左エ門ハ余う婿の兄あり此家ハ先代より秘藏する亀の化石あり傳てらる近き山間の土中よりお掘得らる實小化石の奇異あり茲小図を奉て弄石家の鑑金と俟百樹日件の図お視る小常ある亀といふ形状少く異あるおあり依て案る小本草ハ所謂秦亀一名莖龜ありいハ山龜といふ俗ハ石龜といふ物おあり秦龜ハ山中小居るものありゆえは呼で山龜といふ春夏ハ溪水小遊び秋冬ハ山小藏る極て長寿する亀ハ是ありとて又莖龜と一名するハ周易小亀を焼て占ひ

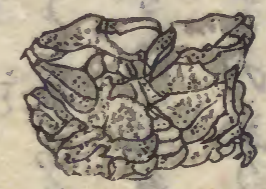
甲之圖



蟹之化石



腹之圖



堅 曲尺五寸五分
橫 四寸五分 厚二寸六分
重 八百目

腹之圖



牧之筆圖

一の以亀ありとぞ 件の亀の化石本草家の鑑定を得て秦
 亀あり一層の珎を増ア山よて 掘得とありとありと秦亀不
 ちきやうあり化石といふものあまも見えふ多し小きもの
 あるいままも体全も稀あり圖の化石ハ体全く且大あり珎
 とすべし。余先年俗ふり大和めぐりまゝるるをり半月あ
 まり京不ありとい旧友の画家春琴子不就て諸名家とたつ
 糸一時鴻儒の聞高き頼先生 名襄字子成山陽 号通称頼徳太郎 も訪ひ坐談化
 石の事ふおとい先生余は蟹の化石一枚と恵その色枯すし
 て生ぐ如く堅硬ことハ石あり潜確類各又本草三才圖會等
 小しる石蟹泥沙と俱は化して石ありとあるア一益養
 する石莖の下ありふ水中不動が如く亀の徒者ふ其圖と
 出す是も今ハ名家の形見とありぬ

○夜光玉

雲根志灵異の部小曰予が隣家小壮勇の者あり儀兵衛といふ
 或時田上谷といふ山中不行て夜更て飯るふむらうある山の澗
 底より青く光り虹の如く昇てまゑハ天不接る坎男勇漢あれ
 无二元三小草木を分けて山と越谷をけりてかの根元をさぐりける
 小たが何の異る事もある石ありひろいとりて背不負ひ飯る不道
 まから光るものと前の如く甚だ夜道の勞をたすりり曉の頃我が
 家不着ぬ件の石を軒の外不直し置朝飯をぐもて彼石と見
 んとすり小石あり一り不せし事やらんとさみぐふたづみむれも
 行方とすすとあり又本国甲賀郡石原潮音寺和尚のものごりり
 近里の農人畑を掘居し不拳をある石をりりせり珎石常の
 石よりハ甚だごりりようて取りかたりぬ夜不入りて光ること流星の

如—友のりよ是ハ灵石あり人の持中のふあら守家ふあふハ必災あふ
 —をやくおやううてまつア—と意をきうて斧とりて打碎しと竹
 やぶの中をてりり其夜竹林一面ふ光る事数万の螢火の如—翌
 朝近里の人きうて集り来り竹林をたづひらふサ—のころ
 までも一石も有る事あり又筑后国上妻郡の人用ありて夜中近
 村一行よッの小川ありかちまうりせ—ふあふやらん光る物あり拾ひ
 どりて—バ小石あり翌日さる方—献すをきうてくし尖うとを
 一条 是等ハ他国の事あり我が越后ふも夜光の玉のあり—事あり
 全支 新発田より 浦原 東北加治とのふ所と中条といふ所の間路の傍田
 の中ふ庚申塚あり塚塚の上ふ大き二尺五寸をうりの田石と鎮し
 て—れを祀る此石との先農夫屋の後の竹林を掃除して竹の根
 を掘るとてかの石一ツを掘得りその色青とありて黒く甚く

あめらうるあり農夫らまをりて藁をうつ盤とあす其夜妻庭ふ
 々々燦然とて光る物あり妻妖怪ありとて驚叫家主壯夫
 三五人を伴ひ来りて光る物を打ふ石あり皆りて怪と—石と竹
 林ふ捨つその石夜毎小光りあり村人おそまて夜行ゆのあり依て
 此石を庚申塚ふ祭り上ふ泥土を塗て光をかす今猶苔むして
 あり好事の人この石をてても村人崇あらん豈と畏てゆきびとを
 又駒ヶ岳の麓大湯村と村尾村の間を流る溪川を佐奈志川と
 けふいせ湯水せ—頃水中ふ一点の光あり螢の水ふあふが如—
 数日処を移す一日暴雨ふ水増て光り—物所を失ふ后四五町川
 下子光りある物螢火の如—此地山中ふまふ村夫等昏愚や—
 夜光の玉ある事をあす敢てたづひらむとむる者もあふ—ふ其秋
 の洪水は夜光の玉あふびあふて所在を失ひ—とて

以上北越 奇談の説 借

茲小夜光珠の其事あり我文政二年卯の春下越後と歴遊せし
 とり三嶋郡小入り伊弉彦明神と拜旧知識あるまは高橋光則公羽と尋
 一公羽大ふよろこびて一宿を許しぬ公羽和哥を善し且好古の
 癖ありて卓達の人あり雅談湧が如くおゆす節をどぶめ事四五
 日あり一夕翁の語りたるい今より四五十年以前吉田の
 ちり大鳥川とて溪川小夜ふく光りものありとて人埒て近
 りのぬり一公羽川の近所小富長村とてありまは鍛冶の兄弟
 あつひとり母と養ふ家最貧し公兄弟剛気あるゆのゆ名お光
 り物を見きりぬゆ一妖怪ありて退治して村のものどもあつ肝と
 一かんとてある夜兄弟かこふゆり一おをり一も秋の頃水もま
 さり一川面をこもふ月暗くしてたゞ水の音ときくのこ兩人炬
 をとりて一とてらる一とてらるふ光るものゆらぬくまは怪しむ

とて守りて入のり一の空言あらんゆとて飯らんともなる水
 上俄小光明と放つまをよとて兩人衣服を脱して水小飛入り泳ぎよ
 りて光る物を探りてふくら枕をもちる石ありこまを取
 家小飯りまづ灶の下に置一小光り一室を照せりまづぐのよ
 母ふかろけと不思議の室を得るとて親子よろこび近隣より来
 りるをあり一づりのまらぬ者どもあはれ趙壁随珠ともおも
 うち過ぐかくて后弟別家ある時家の物ニツ小ちて弟ふとんや
 母のつひ一弟の家財を望んで光る石を持去んとて兄がつと光る
 石を拾ひ得一我が企あり汝が我が力と助しぬあり光る石は親
 の譲ふあら守兄が物あり家財を分るるおやのあつととそ
 へけとふまはし一弟のあつあつの石のおおつゆのあついんと
 ばぬ身光る石を拾んと企ふあつ守妖物と退治せんとして川

たりん身より我先よ川へ飛びり光りものを採りあててかづき
 あげし我ありきるこいおれいむらひに持さらんふあつあえい若
 く妹兄がものまう弟がのまうと口論やままで終ひつてあひらち向
 ひて母やうくよれしきつめあつて光る石をニツ破りて分つと
 り弟さらばと明玉をとりて銀治まる鑽の上ふのせ鏡をゆて
 かまうせて打つとばきむびり明玉碎破内ふ白玉をとりて
 碎け水あつて四方へ飛散り其夜水のうらうら光り暉く事堂の群
 うらうら如くまうしふ二三夜やしてその光りも消失けりともつうふ頑愚の
 手ふありしといひあつて稀世の宝玉鄙人の一槌をうけて亡びるに
 玉も人も俱ふ不幸とつとと語らむとき牧之案よ橘春暉が著る
 北函瑣談後編の二藏石家の事との條ふ曰江州山田の浦の木之内古
 繁伊勢の山中甚作大坂の加嶋屋源太兵衛其外ふも三都の中の

好事家侯國の逸人藏石小名の高き人近年數一余も諸家の
 奇石を見しに皆一家の藏る處三千五千種小いもの多き中日の
 目を尽してやうく眼をみる夏を得るふいけるもの多き中ふ
 も格別小目をおどろりすむらひの珍奇の物に无りあり加嶋屋
 源太兵衛ものつりふ過一年北国より人ありて奉の太さ乃
 夜光の玉ありよ一室を照すよき價あつて賣んといひうた
 即座小其人よ托して曰其玉求たし暗夜その玉の入りたる箱
 の内をくり白きやう小見えむらび金五十兩ふりむびり又その玉
 ちか闇夜小大ある文字一字もも読えりまふ金百兩ゆりむ
 びり又昏状むむむらび三百金ゆりよ一室をてらむらむら
 身上のつらむの力を尽して求むびり媒して玉りるびり
 といふがそのちかあめの便むらびやめぬ空言ふてありしと思つる

加葛屋が北国の明王を身上衣みづかみし買人と約せし小類せり
 さて又癸辛雜識みせしん続集つづき下くだ小機婦糸を水ふひておきし
 小夜中白く大なる蜘蛛くまきりてその水をとのむ身小光り
 をかろかの婦人むすめをを見て大なる蜘蛛くまをおぼし
 蜘蛛くまをとりし小腹小夜光珠あやのたま在あり
 事ことを前文小夜之老人が引くる北越奇談王の部ぶは越後えちごありし事ことを
 せし且又容易やすく得えるべき各おのる事ことは北越奇談の作者そ俗子しやくしの目めは奇あと
 見みる事ことは癸辛雜識みせしん集しゅう都下みやこは得えるべき本ほん各おのる事ことは
 第卅だいじゅう九きゅうは轉輪聖王の徳とくよる事ことをりし一尺六寸の夜光摩あやのたま
 尼室あまむろに彼国あまのくに十二由旬じふにゆうしゆんを照すてあり文ぶん多たけしあけす蓋けし一
 由旬ゆうしゆんに異国の四十里あり十二由旬じふにゆうしゆんに日本道にっぽんみち六十六里あり一尺
 六寸の玉たま六十六里四方と照てるは奇異きいとりし一轉輪王てんりんおう此王このおう

と得て試たまし高き幢たうの頭かぶ小擧こあ著あけるは人民じんみん等ら王の光りひかりと
 もままず夜の明あけりとおひわのは家業けさうをためららしと記し
 せりは事こと碩学せきがくの聞き高たかき了り阿上人あじんのうの語ことばふききてかの經きやうと借か
 得えて読よみしは夜光の玉あやのたまの親おや玉たまありし

餅花

餅花もちがはは夜よの鼠ねずみがよよ野山ののやま一いふはちぢぢぢといは其角そのかくがまいのますまふ
 了り江戸えどをあるは餅花もちがはは十二月じふにがつ餅搗もちうの時ときもちまかか作りつくり歳徳としとくの神かみ
 棚たなへまりし餅諧もちがはの季きは冬ふゆとす我國わがくにの餅花もちがはは春はるありは正月しんげつ十
 四日じゅうよっぴまでと大おほ正月おほしげつといは十五日じふごにちより廿日にじふにちまでと小こ正月こしげつといは是こ我
 里俗さとじやくの習なせありし正月しんげつ十三日じふさんにち十四日じふよっぴにちのうちは小門こかど松まつのかがり
 と取とり拂はひは我國わがくに長岡ながおかありし正月しんげつ七日しちにちふかかで
 餅花もちがはと作りつくり大神おほかみ
 宮歳徳みやとしとくの神かみ夷えいのは餅花もちがは一い枝えだづつ神棚かみだへまりしその作りつくり

高野山 高野山

三十一 高野山



剛夫得名玉園

高野山 高野山

高野山 高野山

やういづづ木やう木ある川揚の枝をとりて餅と
 三角又ハ梅梅の花形ハ切らる紙かの枝ききあるハ團子と
 もまじりてこれを蚕玉と云ふ稲穂又ハ紙をて作りたる金銭縮む
 きびとまじりていづづのハ形を紙をて作り農家ハ木とけり
 て鋤のたぐハ農具と小さく作りてもちをまの枝のくくるまじ
 ておのまじりて家業ハあつらるものいづづが掛るまじりてその業
 の福といひるの祝事ありもちをまをて作るいづづの
 手業あり祝いとて男女とももちまじりて声よく田植哥と
 云ふ女ももちをまじりて夏うといへく家の上を子雪のまじりて
 かとおのまじりて雪国の人情あり炊餅花ハ俳諧の古き季寄ふ
 もつてこれハ二百年來諸国ハあるハ勿論ありちとら江戸ハ
 季やの子小見の子遊ハ作りあきあふまじりて

斎の神勸進

我が塩沢近辺の風俗ハ正月十五日まへ七八歳より十三四までの
 男の童ども奇の神勸進といふ事をまじりて少一富家の童ども
 びきりハ楠木と上下より削り掛て銚の形を作るまじりて二棒
 と云ふまじりて二本大小まじりて上下とまじりて童儻ハ一升まじりて
 せ又ハいもあつてくびあつるあつるの中ハ五六寸たりの木を頭
 たり入形ハ作り目鼻とまじりて二ツつらて女神男神と一女神
 ハかいら綿とまじりて紙をて作りたる衣服ハ紅をて梅の花を
 ちまじりて男神ハ烏帽子をまじりて木とけりて髪と守紙のい
 ちまじりて若松とまじりて杖ハ松かの井の内ハおまじりて奇の神勸進
 とまじりてありて敢物の欲ハあまじりて正月あまじりてハツをり
 まじりて一人のまじりて見輩のくまじりて事ありてまじりてハツをり

切餅ありい錢もふふ又まづ一きものいこらづら五七人十人餘も賞
 とや一茜木綿の頭巾（ブギン）もあたまぎのいりもあつらふるをむりかの斗（ト）捧
 一（一本）き一（一）の二神と柳（ヤナギ）のふ入（ふい）まて首（くび）かけ「さの神さふん
 錢（カネ）でも金（カネ）でもいづついづついづつと門（かど）とあつてあつていづつ
 錢（カネ）をいづついづついづついづついづついづついづついづついづついづつ
 よあつていづついづついづついづついづついづついづついづついづつ
 斗（ト）捧のけづりかけの三尺（さんせき）をいづついづついづついづついづつ
 て功進（こうしん）をいづついづついづついづついづついづついづついづつ
 かい「せむでもかむでもいづついづついづついづついづついづついづつ
 やうふ泉（いづみ）のすゝらういづついづついづついづついづついづついづつ
 して功進（こうしん）の錢（カネ）もあつて齊（いっせい）の神（かみ）を祭（まつ）入用（いりよう）とまらう
 下（した）へふ 又去羊（いづせ）むいづついづついづついづついづついづついづつ
 る（る）

大勢あつまりかの斗捧（ト）をいづついづついづついづついづついづつ
 同音（どうおん）ふいづついづついづついづついづついづついづついづつ
 と入（い）まて物（もの）をいづついづついづついづついづついづついづつ
 〇さて以事（いじ）たあいのあつていづついづついづついづついづつ
 醒（せい）斎（さい）京傳（きやうでん）翁（おきな）が骨董集（こつどうしゆ）を讀（よ）て本（ほん）扱（あ）り事（こと）を發（は）明（めい）せり骨董集（こつどうしゆ）
 上編（じやうへん）下（げ）粥（じやく）の木の條（じょう）を粥杖（じやくじやう）。祝木（しゆき）。わいけ棒（ぼう）との物前（ものまへ）ふい
 斗捧（ト）小同（せうどう）一（一本）京傳（きやうでん）翁（おきな）の説（せつ）粥（じやく）の木（き）といづついづついづつ
 杖（じやう）と子（こ）もあつていづついづついづついづついづついづついづつ
 として。枕（まくら）の草紙（くさし）。袂（たもと）衣（い）。弁内待（べんないまち）の日記（にじき）その外（ほか）くいづついづついづつ
 上代（じやうだい）の宮裏（みやうら）近古（きんこ）の市中（しちゆう）粥杖（じやくじやう）の事（こと）を舉（あ）げて考証（かうしやう）甚詳（しんじやう）あり今
 我（われ）が郡（ぐん）ふい斗捧（ト）小則（せうすく）の粥杖（じやくじやう）の遺風（いふう）あり事（こと）を發（は）明（めい）せり
 我（われ）国（くに）も祝木（しゆき）ありい御祝捧（ごしゆきぼう）といづついづついづついづついづつ
 七（しち）八（はち）百年（ひゃくねん）前（まへ）より

正月十五日よまらる事京傳翁が引まらるる昏少く老らるるありと
 引昏の中あも明人の作日本風土記あるはゆめとも我國のや
 似たり以昏ハ今より三百年むりいせんの日本の風俗を明人
 聞てて昏さるものおもひ今我國少く小童のたむむと
 ろの三百年むりさるの風俗遠境あもうりのるたあらし
 京傳翁引る日本風土記 卷の二時今の部とあり法文の 但街道
 郷村の児童年十五八九已上及ぶ者各柳の枝を取り皮とをり
 木刀は彫成ち皮と以復外刀上小纏ひ用火焼黒め皮を
 去り以黒白の花と分つ名づけて荷花蘭蜜とふ再荆棘の
 條を取香花神前小楠供次小集る各童手小木刀と執途は
 隊前凡有婚无子の婦木刀と將て遍身赤之口は荷花蘭蜜
 と舎ふかあ守女婦当年孕男と生我國少く児童等が人の

門を斗捧ちたるき姫をたせ聳をたせとのるうらるる右の風
 土記の俗習の遺事あるは

百樹案よ件の風土記小再び荆棘の條を取り香花神前小楠
 といへる餅花と神棚へ供さる事を聞て粥杖の事と混錯
 しく記したるものなり狀りとまは餅花も古き祝事あり

○齊の神の祭

吾國正月十六日小齊の神のまつりといふ所謂左義長あり
 唐土小爆竹といふ唐人除夜の詩小竹爆竹千門の响燈狀刀戸明あ
 の句あをり爆竹ハ大晦日あはる事あり吾朝てハ正月十五日
 清涼殿の御庭あく青竹を焼きて正月の昏始を以火小焼く
 天小奉るの義とて十八日あも又竹をわたり扇を結びつけ回
 御庭あく焼く玉ふを祝事とせさせ玉ふ民間あもをり字ひ

て正月十五日正月よかどんたたるものかあるを燃すこと左義長
 とて昔よりする事ありことまを齊の神祭りといふも古き事な
 り爆竹左義長の故事俳諧の季寄年浪草小諸春と引く
 ことしつとつと。吾う郡中かく小千谷といふ所ハ人家千戸不
 あまる饒地ありことまをふるふ齊の神の幸も。は川りも盛
 大ありことまをまつふその町ふおのく毎年さごめの場
 所ありことその所の雪をささるごとめれこと三間たりふ
 周りたる高さ六七尺の山き壇を雪めて作りことまふ二処
 のより階を作ることまも雪めてまをる里俗呼て城といふこと
 壇の中央小杉のあまの木をたて柱と正月ふりことまのあふ
 くれぬくこの柱ふむきひつけ又ハ積あげて七五三といつて上
 よりむきひめことまを蓑のことごとくあふことまを
 大根注連といふもの左右に開く扇をつけ飛鳥の状と作り
 つける壇の上ふい席をまうけく神酒をささる城町の長くるもの
 礼服をつけく拜をまう所繁昌の幸福をいめる以事をまをことま
 きことめたる火を四隅より移す油滓を火の入り易きやうに
 なしむくゆ名端々熾ると状あがる此火あり餅とやまてくらふ病をこのぞく
 ことま世ふあるくあり一事をあり
 是則爆竹左義長あり他国あてもある事あり或人の話ハ以事
 百余年前までハ江戸あもありしが火災をまうるたふ村下て
 やことまをことまを又おんべのふ物を作りてこの左義長小醫て
 火をさうろせ焼を祝事と守おんべハ御幣の訛言ありその作り
 やうハ白紙と色うことまを数百枚つきあをせことまを細き幣束
 のやうふきりきげまふ扇の地紙の形をきりりのことまをことま
 数千あつて青竹まうことま守大小長短ハ作る家の意ふ

大根注連といふもの左右に開く扇をつけ飛鳥の状と作り
 つける壇の上ふい席をまうけく神酒をささる城町の長くるもの
 礼服をつけく拜をまう所繁昌の幸福をいめる以事をまをことま
 きことめたる火を四隅より移す油滓を火の入り易きやうに
 なしむくゆ名端々熾ると状あがる此火あり餅とやまてくらふ病をこのぞく
 ことま世ふあるくあり一事をあり
 是則爆竹左義長あり他国あてもある事あり或人の話ハ以事
 百余年前までハ江戸あもありしが火災をまうるたふ村下て
 やことまをことまを又おんべのふ物を作りてこの左義長小醫て
 火をさうろせ焼を祝事と守おんべハ御幣の訛言ありその作り
 やうハ白紙と色うことまを数百枚つきあをせことまを細き幣束
 のやうふきりきげまふ扇の地紙の形をきりりのことまをことま
 数千あつて青竹まうことま守大小長短ハ作る家の意ふ



斎の神祭事之図



ほうせたまあるを以て人小誇る棹の末ふひしき扇四ツをよせて扇
 小家の紋をとりとりあぐり紙をて作るものもある甚く美事
 ありさまを作つてまづものもしくぐ門へ建やく事五月の櫛のあ
 つひあり十五日ふりてかの場所へかきおき左義長おめりて
 焼捨るを祝いと一扇とを現る人群を好す、勿論事をとりてハ
 ころころして喜酒の宴をひらくことこれ、國君盛徳の餘澤
 あり他所も左義長あまもまづ、小千谷を盛大とす
 百樹曰余京水をちて越後へ遊び一時此小千谷の人
 岩淵氏牧之老人のの家小節をとりて事十四日八月あじ
 の嗣子廿四五許号と岩居といふ谷をよめて余よ遇せしこと
 甚馬小千谷、北越の一市会商家鱗次とて百物備ざるこ
 とあり海を去る事僅し七里あるは魚類よ之しからず

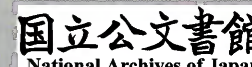
余塩沢あり、ハ四十余日其地海は遠くして夏ハ海魚よ
 之し江戶者の口は魚肉の上らざり、事四十余日小千谷
 ありて生鯛と喰せし美味あり、事いふの
 らず又鮭の時節あつ小千谷の前川ハ海は朝暮の大川れ
 ハ今捕しをちて小庵丁も味をい江戶もまゝあり一日鮭とてん
 ちらとふ物やしてせり余岩居よむひこまふ地あつ、
 名を何とよぶと問ひ、ふ岩居これハテンプラといふあり我
 とし、その地物の名義曉し、かく古老はたづねたりともある人
 さらあ、先生の説をきくと、ふ余答てまづ食終てテニ
 ラの来由を語つ、ふひの鮭のてん、と飽ちてふ喰せり
 ○てんぶらの説。煉羊羹美の起原
 岩居よ語て曰今をさる事五十余年前天明の初年大阪

わく家僕四五人もつゝふわどの次男年廿七八をくり利助とのふ
 むのその身よりと一の三もう一の哥妓をつれてせ弁一江戸ふ下
 り余が家の京橋南街 第一街 對いの裏屋に住し一日事の序ふありて
 余が家よ来りより常はせ入して家僕のやうに使やさせ
 けるふ花柳の身と果しつゝものゆゑたまのむもろく才
 むありくよく用を弁ふるゆゑをきき人よ銭がなりとて亡兄
 とたりむむいひとある自利助のやう江戸ふの胡麻揚の辻
 賣多し大阪までつけあげたり魚肉のつけあげはうゆきこのふ
 り江戸ふの魚のつけあげと夜をせふる人おーわまをんを
 うらんとおもふらん亡兄京傳のそくせんはよきおゆひつきありまづ
 うらむいひとて俄に調へさせしふいふちも美味なり利助のそく
 らむを夜をせの辻ふらんふその行灯は魚のそくあげとせ

さんもちやせらまふりどやいあやうな名をつけし玉置とていひ
 けしハ亡兄をむらりてあんにて筆をとり天赦羅をかきとく
 とせむれば利助不審の息をきき天赦羅といひある所謂ふ
 かとふ亡兄うちをこつて足下ハ今天竺浪人ありふりて江戸
 へきりて賣創る物もあるふ天からあり是ふ赦羅といふ字と下し
 ころふ赦ふ小麦の粉あてつゝる羅はうすものともむ字あり小麦
 の粉のつすものさうけとてふ度ありと戯言をまけしハ利助も
 洒落する男もある天竺浪人のふりつきもある天からいひのりつゝと
 大あよろこひやぐて妓店をいひて時あんとんを持ちこりて字と
 らいりもある余がさきねき時天赦羅と大昏して与しふおてん
 ぶら一四銭まで毎夜うりきりて程ありさして一月もたぎらうら
 ぶ近辺所々てんぶらの夜をせのて今ハ天赦羅の名油のゆとく

世上お傳染こころ以小千谷までてんがの名をよる事一奇
事とのどくせんれども京傳翁が名づけ親よて利助が賣るめ
たりといひある碩学鴻儒の大先生もあつてうらむららの講
釈も天下よ我一人あつたをむきければ岩居も手とちて
笑ひりり。先年以てんがの話を友人静廬翁に語りしに
翁ハ和炭の博達 明人黄一正 夷食の部よてんがの
時鳴の圃人あり 作廿四卷翁曰事物紺珠
似る名ありきといひてしめしめ其昏を借りてよるよ。塔
不刺とありて注よ。葱。椒。油。醬。と熬後より鴨或ハ雞。
鶯といひ慢火で養熟とあり蟹とあつてけよはるむ見えり
○さて天麩羅の播布は類せる事あり因よ記す。橘菴漫筆
享和元年京 田仲宣作京師下河原よ佐野屋嘉玄洲といふもの享保
年中長寄より上京して初て大坂十二の食卓と料理し

弘めたる是京師浪花小食卓料理の初ともなはる術娘とい
つるもの老婆とありて近頃まぐ存命せり則今の佐野屋祖ふ
り大坂おくかといれ食卓料理あま弘りたれど野堂町の貴
徳斎を久くつぎてゐる。岩居がてんがとあるまひる
夜よの友蓉岳来り。余が酒をこのまがとて奥て家製か
つて煉羊羹を恵ぬ味い江戸小同。余越後よゆらうんと
賞味して大よ感嘆。岩居よ謂曰以ゆらうんと近年のもの
あり常のやうに味いませらるゆらうん吾がをよるまひる常
のやうに味いませらるゆらうん口ふ入らるゆらうん江戸をよる事遠き
以地もよ来逢のゆらうんかんあるは実よ大平の徳化ありとい
し。小蓉岳も各画とよしし文事ありて好事ものまひるま
きつていひませらるゆらうん菓子ハ吾が家産ありゆらうんと近來の



かのとの由来と示し玉との余らうてのそく。寛政のそく
 江戸日本橋通一町目よと町字を式部小路といふ所小喜太郎
 とて夫婦よ子推いとをうひ菓子屋とい見えぬ篠子造は
 かんざんもかきで以喜太郎いせんハ 貴重の御菓子と調進
 する家の菓子杜氏あるより奉公をせめてあふ住し極製の
 菓子ぞうをせりして茶人又富家のとあまきまひたりとて以者
 が工風とてちがめて煉羊羹と名づけてうりけるよ 羊羹本は羊脂
 あり事純然日鏡
 以喜太郎がねりやうかんとして人々めづらかりてめてあまきまひたり
 とも一人一手めてせのまるもえけふらりきりたりとてうひの
 重箱空しくする事なれりこも余る目前なる所ありかく
 て二年の間小菓子や二軒よ喜太郎をまひてねりやうめんと
 せのそれめづらかりふ今ハ江戸の菓子やさらあり追ひ張り共

小千谷もあまよび共国よ市会とある所ハうねらすあぶく又
 諸国もあまよびといふまよび岩岳とらうて小倉羹もある八重あ
 まりか何のあまよびもあまよびとらうての事雪譜の名よ
 似気あまよび弁とて本文小千谷のそまよびあまひいごたれハ
 人の話柄よ記とありあまよび近古食類の起原とぬぐあれと余る食
 物沿革考小上古より奉てあまよびなまよびこふいからせり

雪中の狼

初編の中よりたむむく我國の獣各ふいさむ山を踏て雪渡
 目よるこも雪ふらうて食ふとがきもあまよび春よいさむ
 の棲いのこも雪いさむいさむいさむいさむ食ふたらす
 一夜中人家あまよび犬あまよび又人よかる事ありとま
 山村の事あり里中人多きもあまよびとてまらばる雪の中



雪入狼入人家圖

雪入狼入人家圖



声をあげてあきおこり村のものをしりぞきつげきつらう
 聲をあげてあきおこり村のものをしりぞきつげきつらう
 といふおもしろきもはげしくもむねばれなくあつまるきつらう娘よ
 といふおもしろきもはげしくもむねばれなくあつまるきつらう娘よ
 きたりたぬらむと目もぢりつて狼三疋をせつりつらう
 きたりたぬらむと目もぢりつて狼三疋をせつりつらう
 小火とたきつておもしろしゆもむねぐふ床の下におげ入りむねも
 小火とたきつておもしろしゆもむねぐふ床の下におげ入りむねも
 とおろがあつるむねもむねも念仏やておもしろしゆも
 とおろがあつるむねもむねも念仏やておもしろしゆも
 つらきつらうつらきつらうせ次の日の夕ぐまに棺一ツは妻と童と
 つらきつらうつらきつらうせ次の日の夕ぐまに棺一ツは妻と童と
 め母の棺とニツ野辺おろしとあつらふ涙とつらきつらうもの
 め母の棺とニツ野辺おろしとあつらふ涙とつらきつらうもの
 けつらきつらうおもしろしゆもむねもむねも母の片足と雪の山
 けつらきつらうおもしろしゆもむねもむねも母の片足と雪の山
 蔭ふらむおもしろしゆもむねもむねも母の片足と雪の山
 蔭ふらむおもしろしゆもむねもむねも母の片足と雪の山
 ちつらきつらうおもしろしゆもむねもむねも母の片足と雪の山
 ちつらきつらうおもしろしゆもむねもむねも母の片足と雪の山
 て順礼もつらきつらうおもしろしゆもむねもむねも母の片足と雪の山
 て順礼もつらきつらうおもしろしゆもむねもむねも母の片足と雪の山
 百樹曰日本の狼ハ幻化事をきつらう唐土の狼ハむねも
 百樹曰日本の狼ハ幻化事をきつらう唐土の狼ハむねも

老狐とあつる宋人李昉等が太平廣記畜獸の部四百四狼美
 老狐とあつる宋人李昉等が太平廣記畜獸の部四百四狼美
 人ハ幻化して少羊と通じあつる人の母あつて羊七十ありて
 人ハ幻化して少羊と通じあつる人の母あつて羊七十ありて
 ちつらきつらうおもしろしゆもむねもむねも母の片足と雪の山
 ちつらきつらうおもしろしゆもむねもむねも母の片足と雪の山
 あつて羊を歴つらう一日その子山お入りて来と採る小狼き
 あつて羊を歴つらう一日その子山お入りて来と採る小狼き
 たりて人の如く立其裾を銜つらうむねも斧あつて狼の額と斫狼
 たりて人の如く立其裾を銜つらうむねも斧あつて狼の額と斫狼
 おげ去りてむねも家あつてつらう小父の額ハ傷の痕あつて見て狼
 おげ去りてむねも家あつてつらう小父の額ハ傷の痕あつて見て狼
 あつて羊を歴つらう一日その子山お入りて来と採る小狼き
 あつて羊を歴つらう一日その子山お入りて来と採る小狼き
 むねも自縣おつてつらう事の由をつげつらう事やぞ。廣異記。宣室
 むねも自縣おつてつらう事の由をつげつらう事やぞ。廣異記。宣室
 志を引てつらうせり悍悪の事小狼の字をつらうもの。残忍なる
 志を引てつらうせり悍悪の事小狼の字をつらうもの。残忍なる
 と豺狼の心とつらう。声のおもしろしゆもむねもむねも母の片足と雪の山
 と豺狼の心とつらう。声のおもしろしゆもむねもむねも母の片足と雪の山
 きつらうと狼毒とつらう。事の根と狼と。反相ある人と狼頭。
 きつらうと狼毒とつらう。事の根と狼と。反相ある人と狼頭。
 義无と中山狼。恣は食と狼食。病列を狼疾とつらう。狼
 義无と中山狼。恣は食と狼食。病列を狼疾とつらう。狼

籍^{せき}の狼^{ろう}穴^{けつ}の狼^{ろう}狽^{たい}もど皆^{みな}彼^{かれ}の譬^{たとへ}て是^{こゝ}をのつあり 文海 撒沙
 獣^{けし}中^{ちゆう}最^{さい}可^か惡^{あく}ハ狼^{ろう}あり余^あ竊^{せう}ハ以^{もつ}為^な狼^{ろう}ハ狼^{ろう}中^{ちゆう}て狼^{ろう}ありを
 とも人^{ひと}少^{すく}て狼^{ろう}あるハよ^よく狼^{ろう}をの^のくす也^{なり}狼^{ろう}あるを
 ろせすこもつるハ狼^{ろう}毒^{どく}をを^をく^くる人^{ひと}あり人^{ひと}の狼^{ろう}あるを
 狼^{ろう}の狼^{ろう}あるよりも可^か惧^{こゝろ}可^か惡^{あく}篤^{とく}実^{じつ}を外^{がへ}面^{めん}と^と奸^{けん}慾^{よく}と内^{ない}
 心^{しん}と^と狼^{ろう}者^{しや}と^とい^い姫^{ひめ}と^と悍^{へん}戾^りを狼^{ろう}老^{らう}婆^ぱと^とい^い巧^{せう}子^し狼^{ろう}心^{しん}
 を^をく^くすも識^し者^{しや}の心^{しん}眼^{がん}ハ明^{めい}鏡^{きやう}ありお^おろ^ろく^く 堪^{かん}ざら
 ん^ん也^{なり}取^とざら^らん^ん也^{なり}

北越雪譜中巻終

雪言二紙巻之中
 八ノ下
 籍の狼穴の狼狽もど皆彼の譬て是をのつあり
 獣中最可惡ハ狼あり余竊ハ以爲狼ハ狼中て狼ありを
 とも人少て狼あるハよく狼をのくす也狼あるを
 ろせすこもつるハ狼毒ををくくする人あり人の狼あるを
 狼の狼あるよりも可惧可惡篤実を外面とと奸慾と内
 心とと狼者とといひ姫とと悍戾を狼老婆とといひ巧子狼心
 をくくすも識者の心眼ハ明鏡ありおろくく
 ん也取ざらん也



